



軍都から商都へ...

今(2025年)から80年前の1945年、すなわち昭和20年は第二次世界大戦が終結した年です。

ここでは、戦中・戦後における立川市の人口の推移をみながら、激動の80年をこのまちがどのように乗り越え変化を遂げてきたのかを振り返ります。

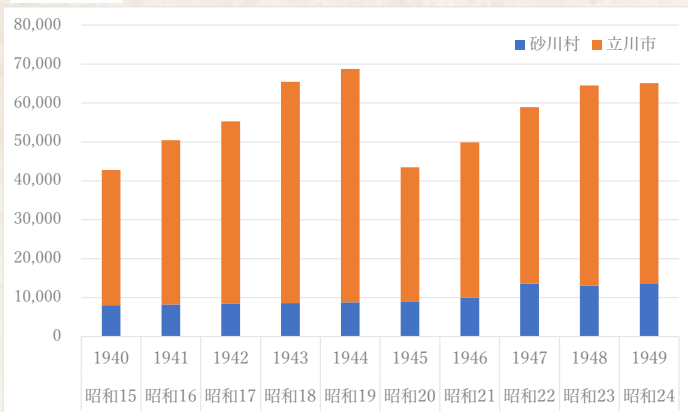
「軍都」立川の産業

右のグラフは、砂川村・立川市における戦中・戦後の10年間の人口推移です。このうち立川市では、昭和19年(1944)には6万人いた市民が20年には3万4,586人に急減し、人口が最も少ない年になりました。

戦前・戦中の立川市は、日本陸軍の飛行場を擁し、航空産業で栄えた「空都」であり「軍都」でした。19年時点での立川飛行場周辺の状況を見ると、西側に陸軍航空工廠※・陸軍航空廠立川支廠・陸軍航空技術研究所などが、東側に立川飛行機砂川工場・立川飛行機立川工場・陸軍航空技術学校などがありました。立川飛行機などの軍需工場では、日中全面戦争やアジア・太平洋戦争開戦に伴い、飛行機の増産が進められていました(写真1)。

※工廠：軍隊直属の軍需工場。

(単位：人) 【1940年代の砂川村・立川市の人口変遷】



▲『砂川の歴史』(昭和38年)、『立川市議会史 資料編二』(平成3年)より作成。



◀ 写真1 昭和19年、立川市軍需労務要員共同宿舍平面図。工業従業員などの増加は住宅不足をまねき、その対策の一つとして軍需労務要員共同宿舍が建設されました。ひと部屋の広さは4畳半で押入が付いていました。

戦争末期の立川

立川市は軍事施設・軍需工場などを有していたことから、東京都区部や武蔵野町(現在の武蔵野市)・昭和町(現在の昭島市)・広島市・小倉市(現在の北九州市)などととともに疎開区域に指定され(写真2)、人員疎開により、立川市からは約1万人が転出しました。また、防空法に基づいて建物疎開も進められました。

昭和20年(1945)2月には、陸軍航空本部で立川飛行機株式会社の飛行機・発動機・機械・動力工具・材料等を分散疎開させる計画が立てられました。飛行機のうち飛行可能なものは高萩飛行場(埼玉県日高市)などへ空輸し、飛行できないものは誘導路を設置して飛行場外に搬出のうえ整備続行とし、発動機・機械・動力工具・材料などは都立二中(現都立立川高等学校)、山水中学校(現桐朋高等学校、国立市)、府中刑務所(府中市)、霞ヶ関(川越市)、河辺(青梅市)などに疎開させるというものでした。戦争終結の8月15日以降、飛行機工場・軍作業場は機能を停止し、立川市内を走っていたおびただしい日本軍の乗用車・軍用トラックは一台も見られなくなりました。



▲ 写真2 昭和19年、疎開命令に基づく北多摩運送株式会社の立川から国分寺への移転通知(葉書)。

立川の人々の戦中・戦後

占領、そして「基地のまち」へ

昭和20年9月3日、立川へ進駐した米軍は、飛行場や隣接する工場を接収し、同5日には立川基地を設置しました(写真3)。関連工場も軍需品の生産を禁止され、立川に残っていた工場労働者は職場を失い、故郷へ帰る者が続出しました。

このように工業は縮小しましたが、基地からの流出物資は立川駅周辺のヤミ市をにぎわせ、基地に勤務する米軍の将兵は、ゲート周辺(曙町・高松町・富士見町)で商店街の重要な顧客となりました(写真4)。このほか、配管や電気工事など、一部の専門技能を持った人々が、米軍基地の整備のために日本政府を介して雇われることもありました。こうした基地経済を背景に、戦後の立川では商業を中心とした復興が始まりました。



▲ 写真3 接収で米軍基地となった立川飛行場関連施設。



▲ 写真4 昭和27年頃、米軍立川基地のメインゲートが面していた曙町二丁目交差点。米兵向けの看板が並び。

「基地のまち」から「商都」へ

戦争が終わったことで、疎開や動員で立川を離れていた人々も徐々に戻ってきました。立川基地が極東地区随一の輸送基地になると、修理工・料理人・ハウスメイド・運転手など、基地内外で多くの雇用が生まれ、人を集めるようになりました。

昭和25年(1950)の統計では、「軍都」であった昭和19年に記録した6万人をついに上回り、最大人口を更新しました。昭和30年代に入ると、将兵の減少や雇用の縮小により、徐々に基地の経済的な影響は小さくなっていきます。一方で、デパートが次々と開業するなど、立川の商業的な発展はますます進みました。

基地の返還から現在へ

米軍立川基地は昭和52年(1977)に、全面返還されました。その跡地は広域防災基地の建設から始まり、国営昭和記念公園の完成を経て、現在では業務ビルや商業施設が並び、日々のにぎわいを生み出しています。

80年前の激動は、現在に続く大きな転換点となったのです。(事務局)

写真の説明・出典と参考文献

写真1、2、4：立川市歴史民俗資料館蔵(写真1、2は旧立川市役所文書)
 写真3：国土地理院提供の昭和22年撮影空中写真を加工
 『新編立川市史 資料編 近代2』(2021年)P.523～527、530～548、550～552、554、573
 『新編立川市史 資料編 地図・絵図』(2019年)P.98～99、122～123
 『たちかわ物語』Vol.8-P.10、Vol.10-P.6～7、Vol.15-P.4～5
 『武蔵村山の戦跡』武蔵村山市教育委員会(2025年)P.5～6
 『新編立川市史 資料編 現代1』(2020年)P.49～51、90～91、184～203
 『新編立川市史 資料編 写真集』(2024年)
 立川市議会史編さん委員会編『立川市議会史 記述編』立川市議会(1992年)
 中野隆右編『立川—昭和二十年から三十年代—』ガイア出版(2007年)
 立川飛行場に関する学習会編『昭和記念公園は飛行場だった』立川市中央公民館(1995年)